

Μια ανήθικη αντιφωνα

悖徳的なアンティフォナ

(2004)

depraved antiphon

8bit(Octopus TACO Bitch)P

Pianoforte

poco andante

molto lento

viva voce

G.P.

A

poco mosso

ff

B

adagio ma poco mosso

1.

2.

pf.

*

C

1.

2.

pf.

1. 29 **D**

2.

pf. *canto*

1. 39 **E**

2.

pf.

1. 49 **G** *meno mosso*

2.

pf. *allargando*

59 **H** *andante poco ma serio*

1.
2.
pf.

69 *allargando* **I** *adagio*
allargando *poco lamentoso*

1.
2.
pf.

78 **J**

1.
2.
pf.

1. 88 K *canto*

2.

pf.

1. 97 L M

2.

pf.

1. 107 *allargando* N *meno mosso*

2.

pf.

117 O molto lento

1. *smorzando*

2. *smorzando*

117 *pf.* *smorzando*

「悖徳的なアンティフォナ」をセルフカバーしてみた (2011/12)

「アンティフォナ」と呼ばれる曲であったり歌唱スタイルをお調べいただければ、曲としての意味や、アンチテーゼを感じていただけないか、といったタイトルです。

楽器の指定がないのは、仕様です。

弦楽器でなければ演奏は不可能ですが、弦的なフレージングは敢えてしてありません。

勿論歌唱もおよそ不可能でしょう。初演に至らなかったのは演奏家の事情ですが、

そもそも演奏困難な音を書いたところに根源があります。

今回ルカに歌ってもらって非常に満足しています。他に演奏機会にも恵まれない曲でしょう。

ピアノは…私が弾ける程度なので、さほど難しくはないはずです。

初演に向け書いてあった表現指示や強弱は、ほぼ排除しました。

音符だけが目安になる曲だからです。

3度移旋に凝っていたころの作品です。

この後に書いたフルートソナタで3度移旋については満足しました。

私のクラシックのオリジナルで調性ものは多くありません。

猿真似にならない音を書く…という点で、

私としては「いい線いっているのでは？」と当時は思いました。

今見るとどうでしょう…誰にも書けない音を書けているのかどうか…。

形としてはソナタ形式に意匠を凝らしてみました。

導入でAとB2つの動機を提示して、

低音が音階をひたすら上がり続ける第1主題が4度調で確保されます。

移行部で動機Bを確保して、低音がひたすら下がり続ける第2主題を提示します。

その後、簡易的な保続部で提示部を終え、動機Aを繰り返す再現部に移行します。

展開部がないソナタ形式の歴史は古く、多くの著書でも取り上げられる手法です。

再現部では3度移旋された変ホに始まり、その7度調で第1主題を確保します。

これは、曲を支配するハ調へ戻すためで、

古典派のリトルネロ形式によく見られる手法です。

ここでは転調が強引にならないよう、旋律線での補間をねらっています。

その後も提示部と同じ丈で再現され、保続部の後、動機Bで終了します。

性格として第1主題は純調性的なもの、第2主題は副次調性的なもの、を意識しており、

それぞれの移行部で動機をうまく散らし調性感から罫留音的な要素への転換を図っています。

第2主題への移行部は、保続的な音と罫留的な音とで調的に調性を崩壊させるのに成功していると思います。

一見とても古い音楽の様な画面(えづら)の楽譜になるよう、

そして、閑(しず)かに、ただし決るような音を書きたかったのですが…

どうお感じになりますでしょうか。深い音を書けていれればいいです。

このような作品が、こうして日の目を見ることができて、とても満足しています。

ご覧いただきありがとうございます。ありがとうございました。

仮に、こんな作品を演奏する強者がいらっしやいましたら、是非お聴かせください。

涙を流して喜びます。

最後に、ボカロクラシカの今後にも、さらなる発展と幸あらんことを祈念して。